

聖書：ガラテヤ5：22～26

説教題：御霊の実（二）

日時：2013年6月23日

パウロはこのガラテヤ書で、人が救われるのは律法の行ないによるのではなく、ただイエス・キリストを信じる信仰によることを述べて来ました。しかしこのことは、だから私たちは良い行ないをする必要は一切ないということではありません。確かに人の救いは律法の行ないによりませんが、救いの恵みにあずかり、御霊に導かれて生きる人は、必ず御霊の実を結ぶ人となります。そして律法を全うする者になります。ですから私たちは自分は正しい救いの道を歩んでいるのかどうか、この御霊の実のリストを良く見ることによって、自分自身をチェックして行く必要があるのです。

22～23節には御霊の実として9つのことを述べられていますが、この「実」という言葉は単数形ですから、これらは9つのバラバラの実と言うより、一つの御霊の実の9つの側面と見る方が適切であると思われます。この9つの分類については色々な考え方が提案されていますが、一般的には3つずつの3グループに分ける考え方がポピュラーです。最初の三つは特に神との関係に属するもの、次の三つは対人関係に属するもの、最後の三つは自分との関係に属するもの、ということです。最初の三つは前回見ましたので、今日は4つ目から見て行きます。

4つ目は「寛容」。これは怒るのに遅いということです。誰かが自分に悪を行なっても、すぐにカーッとしない。人間関係において厄介だと思われる人にも忍耐し、その人を受け入れる用意を持って接する。何よりも神が私たちにそうして下さいました。神は怒るのに遅く、忍耐において豊かな方です。その神の寛容に感謝している者として、私たちもまた他者にそうすることです。5つ目は「親切」。これは優しさであり、他者への思いやりです。自分と意見が合わない人、うまく行かない人にも、そうする。きつく当たったり、厳しい目でにらんだりしない。親愛なる情をもってアプローチし、その相手のために仕えることです。6つ目は「善意」。これは今の「親切」と似ていますが、ギリシャ語でも「善」ということが強調されています。すなわち相手に親切であると同時に、相手にとって善なること、善いことのみを図り、またそれのみを行なうことです。

7つ目は「誠実」。これは信頼に足るということです。神への信頼から生み出されて来る性質と言えます。仕事においても、友人関係においても、緊急時においても信頼できる人。言っていることがしょっちゅう変わる人ではなく、約束したことをきちんと果たす人です。8つ目は「柔和」。これは争い好きでないこと、謙遜であることです。柔和という言葉で思い起こすのはモーセです。民数記12章3節に「モーセという人は、地上のだれにもまさって非常に謙遜であった。」とありますが、この「謙遜」という言葉は「柔和」という言葉です。モーセはイスラエルの民から何度も不当に批判され、責められましたが、怒りに任せてやり返すことをせず、そんな民のためにとりなし続けた人でした。私たちがこの柔和を持ち合わせたら、どんなに争いがなくなるでしょう。最後9つ目は「自制」。肉の行ないに身を委ねないために必要

なのはこの自分のコントロールでしょう。私たちの多くの問題は自分をコントロールできていないところにあると言えます。それで19～21節で見たような肉の衝動に自分を委ねてしまう。ある人は、この「自制」は9つのリストの最後に位置していて、最初の「愛」と共に、特に強調されていると言っていますが、確かにこの自制こそ、互いに争い、食い合っていたガラテヤ人に必要なものであり、また同じく肉に身を明け渡してしばしば失敗する私たちにも特別必要なものでしょう。

パウロは「このようなものを禁ずる律法はありません。」と続けます。言わんとしていることは、御霊の実は律法に全くかなっていないということです。律法の原理に全く合致し、これを満たすものなので、律法は何の文句もつけない。私たちは御霊に導かれてこれらの実を結ぶことを通して、律法を成就する者へ導かれて行くのです。

さて、御霊の実はこのように素晴らしいものですが、私たちは同時に、現実の自分はあまりにもこれから程遠いことも思わずにいられません。私に本当にこのような実は結ばれるのだろうか。むしろ先に見た肉の行ないの方が私には優勢なのではないか、と思ったりします。そんな私たちにパウロは二つの大切なことを語っています。

その一つは24節にあるように、「キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。」ということです。「キリスト・イエスにつく者」とは、キリストと結ばれた人のことであり、すべてのクリスチャンを指します。ですからここで言われていることは、クリスチャン全員に当てはまります。また「十字架につけてしまった」と過去形で語られていますように、これはすでに過去に起きたことです。すなわち私たちがキリストを信じ、回心した時のことを指しているのでしょう。私たちは私たちの罪のために十字架にかかり、死んでくださったイエス・キリストを仰ぎ見、この方に信頼しました。しかし私たちが知るべきは、そこで死んだのはイエス様だけではないということです。そのイエス様に信頼した私たちも、イエス様に結ばれて、そこで古い自分に死んだのです。回心の時の悔い改めにおいて起こったのはこのことです。私の罪のためにイエス様が死んでくださって感謝と言って、それ以後も同じ自分が生き続けるのではない。私たちは悔い改めた時、十字架につけられたキリストと共に古い自分をも十字架につけたのです。

この自己理解が大切です。私たちは今、イエス・キリストを信じる以前と同じ状態にあるのではなく、私たちは肉に支配された古い自分を決定的に十字架につけたのです。そういう私たちが再び肉の行ないを自分に許容して生きることは何を意味するのでしょうか。それは十字架の処刑場に懐かしげに帰り、そこに打ちつけられたかつての肉の塊である自分に愛撫し、その釈放を願うことです。その釘をはずし、古い自分を十字架から取り下ろし、もう一度、罪のからだをよみがえらせようとするのです。まさかそんなことを私たちが心から願っているわけではないでしょう。私たちは肉による生活には救いがなかったのです。キリストのもとにひざまずきました。19～21節で見た肉の行ないには一時的な満足はあっても、結局、悲惨と災いしかありませんでした。ですからどうしようもない、あわれな自分に叫び声をあげながら、私たちはキリストのもとに来て、古い自分を十字架につけ、さようならをしたのです。ですからそんな

私たちの前には、二つの道があるのではないのです。もう一つの道は捨てたのです。それとは決定的に決別したのです。ですからもし私たちの内に嫉妬とか、高ぶりとか、悪意とか、汚れた思いが侵入してきたら、直ちにそれを追い払うべきなのです。さあどうしようか、もう一度ゆっくり再考してみよう、などという態度を取ってはならないのです。それらにきっぱり背を向け、導かれている新しい歩みへ向かうべきなのです。

もう一つパウロが言っているのが25節です。「もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。」ここの「もし～なら」という表現は、純粋な意味での仮定文ではなく、むしろ事実を改めて深く自覚させるための表現です。すなわちこの意味は「私たちは御霊によって生きているのですから」ということです。この自己理解をも私たちはしっかり持つ必要があります。この事実を忘れて、自分はまだまだ肉に支配されているかつてと同じ人間だと思っていれば、そのような生活しかありません。しかし私たちは古い自分をすでに十字架につけ、今や御霊の支配のもとで生きている者たちです。この重大な事実を、しっかり感謝を持って受け止めることが出発点です。

そうするならそこから出て来るのが、私たちは御霊によって生きている者たちなのですから、益々御霊に導かれて進もうではありませんか、ということになるのです。この「御霊に導かれて進む」という言葉は、御霊のリードに従って進むということです。あるいは御霊の歩調に合わせて進むということです。重大な真理は御霊が私たちを導いてくださるということです。聖霊がイニシアティブを取り、私たちに指令を出してくださいます。しかし聖霊は決して暴力的な仕方では働きません。ある人は御霊の導き方はジェントル・プレッシャーをかけるという方法による、と言いました。

具体的に御霊はどのようにしてそれをされるのでしょうか。私たちが聖書から学ぶことは、御霊は通常は特別な方法は用いないということです。特別啓示が完結した今、聖霊は通常の方法、すなわち恵みの手段と呼ばれるものを用いて働かれます。すなわち聖書を通して、説教を通して、見えるみことばである礼典を通して、また祈りを通して、礼拝を通して、ということです。これらを通して御霊は私たちにこのように歩みなさい、これが神の御心です、とご自身の基準を示し、私たちをリードしてくださるのです。その御霊の指図に従い、御霊の歩調に合わせて進むところに、御霊の実は豊かに結ばれていくのです。

26節に「互いにいどみ合ったり、そねみ合ったりして、虚栄に走ることをないようにしましょう。」とあります。これは特にガラテヤの教会の問題でした。15節にも、彼らは「互にかみ合ったり、食い合ったり」していたことが示されていました。御霊に導かれて歩まない、私たちは簡単にこうなるということです。そうならないために、私たちは御霊に導かれて進む必要があるのです。

地上にある間、私たちは完全に達しないことを私たちは聖書から教えられています。残存する罪との戦いの中に日々あります。しかしだからと言って、私たちは打つ手なしの存在ではないのです。パウロは16節で「御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」と言いました。また25節で「私たちは御霊によって生きて

いるのですから」と言いました。まず大切なのは自己理解です。私たちはどんな存在でしょうか。私たちは自分の肉を、キリストを信じた時に、十字架につけた者たちです。古い自分を捨て去り、それとさようならをした者です。ですから私たちはこれからどの道に行くのか、選ぶうとしている者ではありません。もうすでに一つの道を選び取り、今や神の恵みによって新しい状態にある者たちです。そのことを自覚して、以前の道に戻ることがないように。十字架につけたかつての肉に愛撫し、これをよみがえらせるために戻って行かないように。私たちが導き入れられたのは、御霊に導かれて進む歩みです。御霊のリードに従うなら、素晴らしい実を結ぶ将来が約束されています。私たちの頭に考えられなくても、神ご自身を鏡に映し出す性質を持つ者へ造り変えられて行くのです。私たちは正しい自己理解に立ち、新たな目標を持って、御霊に祈りつつ、御霊に導かれて進みたいと思います。そして御霊の実を結んで律法を全うする者となり、私たちをこのように歩ませてくださる神にすべての栄光を帰す歩みへ進みたいと思います。